

# 戦後日本における文化運動と歴史意識

## —職場の歴史・個人の歴史をつくる運動に関連して—

竹 村 民 郎

### 要 旨

自分史ブームが示すように現代は誰でも歴史が書ける時代である。無名の人々が自分史を書くことは、自分たちの生活を原則において把握すると同時に、歴史意識をどのように確立するかという問題に拘っている。本稿の目的は、自分史運動の前史をなした敗戦後の労働者の歴史を書く運動の成果とは一体なんであったかを明らかにすることである。サークル運動のようなインフォーマルな小集団で展開した労働者の歴史を書く運動を分析するためには、その性格上戦後の文化運動なかんづくサークル運動のトータルイメージが明確にされる必要がある。したがって本稿では職場・個人の歴史を書く運動として展開した労働者の歴史を書く運動を、文化運動との関連で考察した。<sup>1)</sup>

**キーワード** 「人生雑誌」、生活記録、職場の歴史、個人の歴史、組合運動、文化運動、サークル運動、工場の歴史・村の歴史、国民文化会議、組合史

### 序

現代日本は不況の渦のなかにあるが、多くの日本人の生活は表面的には以前と同様の豊かな生活を過ごしているように見える。自分史を10万人以上の人書いている状況は、豊かな社会の到来とはまったく無関係ではないだろう。しかし安定した生活の中で、ゆとりをもって自分史を書く機会をえたとしても、余りにパーソナルな自慢話ばかりの自分史では、紙の浪費に過ぎないのではないか。自分史にとって必要なのは、工業社会から情報社会へという転換を、生活の根底からとらえ直す歴史意識を培うことではなかろうか。ただ後世に残すために書きさえすればよいというわけではないのである。一般的に言えば自分史は、家族や友人との対話、両親から学ぶこと、時間に追われて働きつづけた日々の回顧、斗病記、旅行記、戦争や引き揚げの体験記、戦災体験記等々じつにその内容は多彩である。会社での奮闘記の中には、過度の会社への帰属意識が表現されていることも

1) 本稿は2001年3月10日東京都世田谷文学館で開催されたシンポジウム「自伝をめぐって」における報告「人間の記録はどう書かれたか；個人、職場の歴史、生活記録など」および同年6月27日京都女子大学現代社会学部研究会における報告「戦後日本における自伝の一形態—個人、職場の歴史、生活記録など—」の原稿に基づく。本稿では前述の原稿を全面的に加筆訂正し、また表題も改めた。資料引用にあたっては、漢字の旧字体は原則として新字体に改めた。

ある。その反面自分史の中には、経済活動の尖兵であった人々が停年に達して会社を退職し、過去を省みつつ、妻と二人で老境を生きる喜びを表現している文章もある。そんなとき私はさすがにいい人生の一時を味わうことができるのである。高度成長期、海外の人たち「ほうさぎ小屋」に住んで、「働き蜂」のように働く日本人の生活スタイルを批判した。たしかにワーカーホリックの問題が過労死の様な悲惨な結果を生んだことも事実である。今日あらためてサラリーマンたちの自分史を読むと、その勤勉と忍耐の日々に驚かされることも多い。

色川大吉氏は自分史運動のルーツを、60年代に東京八王子市の橋本義夫氏たちの推進した「ふだん記」運動に求めた。彼はまた自らも『ある昭和史—自分史の試み』（1975）を公刊し、その中で自分史の概念を提起した。<sup>2)</sup> 自分史運動の展開過程で、色川氏の影響が拡大する一方で、後述するような1940～50年代に目覚ましく進展した庶民の生活史を書く運動—生活記録・『人生雑誌』・職場の歴史・個人史などは、自分史運動の影に追いやられて忘れ去られていった。

1940～50年代の時期全国的に高揚したこれらの運動は、戦後日本ではじめて登場した庶民や労働者の文章運動、歴史を書く運動であった。今日色川大吉氏が積極的に評価する橋本義夫氏の仕事は、これらの先駆的な運動を前提としてはじめて正しく位置づけられるものである。もちろん色川氏の書いた『ある昭和史—自分史の試み』は、橋本義夫の運動を加勢するために書いたためであったから、ここに引き合いにだされるのは、色川氏にとってはきわめて迷惑なことであるに違いない。だがそれにもかかわらず、私があえて庶民の生活史の問題を、1940～50年代の生活記録・『人生雑誌』・職場の歴史、個人史等の諸運動から考えようとしているのは、色川氏においてさえ、戦後における庶民の生活史に対する関心は、十分にその多様さと深さにおいてとらえられていないのではなかろうかと考えるからである。そこで第1章において、敗戦後「人生雑誌」ブームの中での無名の人々による生活記録を書く運動を考えてみよう。

## 第1章 敗戦後の「人生雑誌」ブームの再評価

1945年後半期から46年にかけて、アメリカの対日占領政策の重点は日本「民主化」に置かれた。その及ぶところは広汎なもので、治安維持法、特高警察制廃止、労働組合運動の再建、財閥解体、農地改革、神道と国家の分離による信仰の自由の確立、軍国主義教育の中心である修身・地理・歴史の授業禁止、戦争犯罪人逮捕、超国家主義者の公職追放等である。これら一連の重要な「民主化」の総括として欽定憲法の廃止と新憲法の公布が実施された。新憲法制定は主権在民と戦争放棄を明確にし、民主国家日本の政治原則を確立した。天皇自らも46年1月1日神格化否定の詔書を公表した。この詔書は天皇の神格を否定したことにおいて、日本の歴史上画期的な意義をもつものであった。しかし政治、経済体制の「民主化」の目覚ましい進展にもかかわらず、日本人の生活は食料の欠乏と悪性インフレのために窮乏と飢餓にさらされていた。1947年10月東京地裁の山口判事は配給

2) 色川大吉(1992)『自分史—その理念と試み—』講談社学術文庫、p.18～19

生活を固守して栄養失調で死んだ。

46年秋以降、吉田内閣の推進したインフレと大量犠牲を中心とする合理化、産業復興計画が進展するにつれて、労働争議がいたるところで勃発した。これらの争議は労働運動の主導権を握った共産党の指導によって、しだいに政治的色彩を強くし、政府と激しく対立するに至った。その最大の昂揚は47年の2・1スト 決行計画であった。マッカーサー元師のスト 中止指令によって、ゼネラル・ストライキから倒閣、民主政府樹立をめざした労働組合の斗争はかろうじて回避された。敗戦直後日本人の多くは生活擁護のために苦難を強いられており、社会体制の変革を自覚的に受けとめる余裕はなかった。しかし一連の民主化政策の進展のなかで、基本的人権に目覚め個人の自由を重視する考えが台頭してきた。この流れは49年に入りさらに加速していった。こうした動きに逆行するものとして、48年1月ロイヤル陸軍長官は、非軍事化の対日方針を転換することを表明した。それは「民主化」方針を基調として出発した労働運動が、占領軍と対立を強めていったところに端的に示されていた。

49年、20過ぎの若者山本茂実と大和岩雄が『人生雑誌』と称した『葦』を創刊した。3年後大和は独自に『人生手帖』を刊行した。二つの雑誌は競い合って部数を拡大した。無名の人々の手記、日記等の投稿原稿と、有名人による人生指針を掲載した雑誌は爆発的に売れた。そピークとなった55年頃は10種類近くの類似誌が刊行された。当時の若者たちの心をひきつけたものは、まさしく『葦』に代表される『人生雑誌』と歌ごえ運動であった。大宅壮一は『人生手帖』を「マルクスみかん水」と名づけた。新聞は『人生手帖』の読者会として組織された「緑の会」を日本共産党青年工作組織と書いた。高踏的な進歩的知識人たちは『人生雑誌』に集る人々の運動を「無理論」、「俗流大衆路線」と批判した。<sup>3)</sup>『葦』や『人生手帖』に掲載された人生記録に、実感信仰があったことは否定できない。そのほか人生記録にはひろっていけば限りないほどの未成熟な文章表現も見られた。しかし敗戦後の社会の混乱と、既成の権威の崩壊のなかで、戦前のように大人の権威にすぎたのではなく、全国津々浦々の若い人たちが、互いに自己の生活のなかから問題を提起して、新しい価値観をつくりあげようとした点において、『人生雑誌』はきわめて注目すべきである。さらに言うならば、53年あたりから農村や都会を問わず、ひろく青年、働く女性、主婦たちの間で生活つづり方運動が台頭してきたが、これらの運動と『人生雑誌』は、新しい生活文化形成の土壌となった。ところで『人生雑誌』と若い人たちの結びつきを、ジャーナリズムの視点から考えると実に興味深い多くの問題をもっている。全くの素人の編集者がこれまでのジャーナリズムの想像の域をこえた「人生記録」という巨大なマーケットを開発することに成功したのである。『人生雑誌』はみんなで考える若い人々を育てたのみならず、これらの若者の結合の環となった。これはまさに新しい情報ネットワークの形成であった。その意味で言えば、『人生雑誌』は戦後の大衆文化を先どりしたポピュラーな情報装置といえるだろう。戦後日本人は自信を失って、生きるよりどころをアメリカニズムにもとめた。こうした精神状況に対抗して、『人生雑誌』は無名の若い人たちの生活意識に光

3)『朝日新聞夕刊』2000年12月13日付。大和岩雄「人生記録雑誌」

をあて、そこから日本新生の道をさぐるとしたのである。『人生雑誌』は戦後日本の文化運動の中で独自の地位を占めている。

## 第2章 職場サークル運動の様相

敗戦後の職場サークル運動は、戦前のプロレタリア文化運動が培ってきた伝説をうけついで復活したからその運動は日本共産党の思想的影響下に置かれた。全日本産業別労働組合会議（産別）と、日本民主主義文化連盟（文連）の強い影響下に、職場サークル運動は成長していった。50年6月25日朝鮮戦争勃発を契機としたレッド・ページによって差別系労働運動は後退した。この時期職場サークル運動もまた、差別系労働運動の後退と軌を一にして影響力を失った。つまり当時の職場サークル運動は政治性の強い運動であったということである。本来職場サークル運動は日常性を離れた政治行動のなかにあるのではなく、職場の人々の自我拡大の欲求を基調として成立する。とはいっても、産別系サークルと政治との関わり方は、サークル指導者が主張したほど自立的ではなかったのである。沈滞していた職場サークル運動が好転したのは53年である。「幹部斗争から大衆斗争へ」という労働運動の転換が始まった。即ちかつての共産党、産別会議の指導によって、上から労働組合を協力を闘争に動員するというスタイルから、組合員の日常要求を組織し、その自発性をもとに労働運動を大衆斗争のレベルから再建しようという方向への転換であった。こうしたなかでサークル運動の政治主義的傾向が反省されたのみならず、職場の自立的なサークル活動の役割もあらためて認識された。新しいサークル活動では、職場の人たちの日常生活体験をもとに討論を進めて、その問題を解決していく中で、連帯意識を培っていくというスタイルが基調となった。職場サークル運動の経験を交流し、そこから民族文化の要素を包摂した国民文化をつくりだすことを目的として、55年後述するような国民分科会議の指導による国民文化全国集会が開催された。50年代後半職場から生れたサークル運動は、ひろく婦人団体、宗教団体、地域団体等でも展開されるようになった。この時期ジャーナリズムの領域で、職場や各地域のサークル運動が大衆の思想を形成してゆく主体となる可能性について盛んに論議が展開された。鶴見俊輔氏は「自分で考え」て生活し働く人々こそ「新しいインテリ」であると規定した。ではそのような「新しいインテリ」と敗戦後の言論界との関係はどのようなものであったか。鶴見氏は言う。

「日本の言論史の上で、インテリという概念は、敗戦後の期間にゆっくりと変質しており、これからもっと変質してゆくことが予測される。ジャーナリズムは商売の必要上、もっと早く、このインテリの概念の変質に注目し、この十年、変質の度合におうじてさまざまな新しい出版方式を考えてきた。総合雑誌の巻頭論文がやさしくなって来たこと、『文芸春秋』のような総合雑誌のワク外の総合雑誌が出て来たこと、さらに『葦』や『人生手帖』のような投書雑誌の登場、さらに、朝日新聞や東京新聞における主婦の綴り方欄の新設」など。<sup>4)</sup> さらに鶴見氏は現代の知識人論の課題と

4) 鶴見俊輔(1956)「新しい知識人の誕生」、『知性』第3巻第3号、p.149～150

して、新しいインテリの誕生をつぎつぎとマークするものではなく、アカデミズムに依拠している旧来の知識人がいかに新しいインテリへ転生するかという課題を提起して言う。

「つねに大衆全体にたいしてよびかけるといのでなく、何か一つの生活者インテリのサークルと結びつくように、私たち文筆業者の一人一人がしたら、われわれも新しいインテリの識別に参加するだけでなく、自分たちの転生を計画することができると思う。」<sup>5)</sup> 鶴見氏の提案はこれまでのアカデミズムの盲点をつくものであった。鶴見氏のアマチュアリズムとアカデミズムとの間かけ橋をするという方法は『思想の科学』同人による生活綴り方運動、大衆文化研究や小集団研究等に端的に表現されていた。たしかにサークル運動から提起されてくる民衆の生活意識や思想を、より広い視野をもって理論体系と結びつけることから始めて、新しい普辺をつくり上げることの重要性は、ここでいくら強調しても過ぎることはないであろう。私が後述するように微力ながら職場の歴史をつくる運動を推進したことを、結局はそのことと深く関連していたのである。ここで指摘しておかなければならないことは、生活記録運動や職場の歴史をつくる運動が新しい普辺をつくり上げる過程には、思想的陥穽が存在するということである。言い換えれば、個別から普辺への思想的営みにおいては、ともすれば個別的礼賛に墮す可能性のほうが現実的であるということである。50年代の趨勢として、学者のサークル活動への協力が活発となった。学者は政治、経済、歴史等の講師となり、サークルの人々に知識を豊富にすることなどで貢献した。しかし学者がサークルの学習を、当時世俗的権威をふるっていたマルクス・レーニン主義にひきつけて指導しようとする誤りも決して少くはなかった。50年代このようなスタイルで試みられた、新しいインテリへの転生の実験は、一方では「アカデミズムからの冷笑」、他方では「労働者、生活者たちからの反撲」という逆方向からくる二つの危険がつねにつきまとった。

### 第3章 工場の歴史・村の歴史を書く運動が提起したもの

さきに50年代における職場、地域のサークル運動は、40年代職場サークル復活期のそれとは異なり、ごく普通の暮らしをしていた人々の自発性に根ざして展開したことを言った。そしてサークル運動が大衆文化形成に持つ可能性について指摘した。では40年代職場サークルの復活に大きな影響をもっていた共産党及び系列化の新日本文学会(新日文)、民主主義科学者協会(民科)等の大衆団体とサークルの関係はどうであったか。50年夏に始まった共産党の分裂抗争によって、党自体のみならず、新日文、民科等の大衆団体は混乱におちいった。民科が大衆の中に入らねばならないことを決定したのは、51年開催の第6回大会であった。民科歴史部会の指導的歴史家石母田正氏が、独自にマルクス主義歴史理論の混迷の中で、「サークルを型や手とだけ考える習慣を根本的に改める」ことを説いていたことは興味深い。<sup>6)</sup>すでに石母田氏が歴史家と民衆の結合を重視して、「村の歴

5) 前掲論文 p. 151

6) 石母田正(1952)「大衆は学ぼうとしている」、石母田正『歴史と民族の発見—歴史学の課題と方法—』東京大学出版会、p. 296頁

史・工場の歴史」を提唱したのは47年であった。「村の歴史」の目的は「教師の『伝統的な権威の観念』をこわす」ことにあった。「教師が歴史教育の内容についての『自発性と創意性』をもつためには、周囲の人民の生活のいたるところに存在する歴史を自分で書いてみるというやり方が、『古い卑屈な伝統』をこわす一つの力になる」とその趣旨が述べられた。<sup>7)</sup> また「工場の歴史」も根本の趣旨においてはまったく同一である。石母田氏が東京南部地区の池貝鉄工所の青年労働者サークルに参加したときの経験をもとにした「工場の歴史」の内容は以下の如くである。「工場と機械がほんとうに社会化されたとき、池貝のほんとうの歴史が書かれる。この歴史は資本家の書いた経営の歴史でもなく、組合と細胞(共産党細胞—筆者注)がつくろうとする争闘の歴史でもない。これらの歴史が一本の太いたばになった新しい歴史でなければならないと思う。」<sup>8)</sup>

石母田氏の「工場の歴史」の提案で、明白に表現されているのは、労働者の歴史意識の優位性である。さらに言うならば労働者の神聖な歴史意識の体現者として措定されているのは、池貝鉄工所、即ち金属工場の労働者とその政治的表現者たる日本共産党池貝細胞であった。衆知のようにいわゆる「マルクス・レーニン主義」の学説では、金属工場の労働者がプロレタリア革命の中核であると説かれてきた。石母田氏の「工場の歴史」の提案には、明らかに「マルクス・レーニン主義」学説の影響があった。石母田氏の歴史観は、労働者の歴史意識についての楽観的認識と結びついて、50年代のいわゆる国民のための歴史学運動の指導理念を形成したのである。ついでに書いておくと国民のための歴史学運動は、前述した『歴史と民族の発見』の刊行を境として、民科歴史部会と各大学史学科の研究者や学生、教師等をにない手として全国的にひろがった。これらの啓蒙運動の状況について、遠山茂樹氏はつぎのように述べた。『『国民的歴史学』そう叫びたてれば、何かそれ自体ができたかに錯覚する向きがないでもなかった……本格的な勉強、アカデミズムの成果をまああますところなく汲みとるような研究のしなおしを行わなければならぬと、最も誠実に農村入りを実行(村の歴史を書くこと—筆者注)した学生たちから批判の声があが』った。<sup>9)</sup> 遠山氏が指摘したような、村や地域の歴史を書く運動の展開過程に顕在化した混乱は53年以降一層深かまった。50年代前半期「歴史学は運動である」という考え方をもとに、若い歴史家、学生、教師は誠実に地域や農村入りを実行した。しかし奇妙にも「工場の歴史」の提案は全く実行されなかった。<sup>10)</sup> それでは工場の歴史の提案が実現しなかったのはなぜであろうか。それは早急に結論を言うならば、石母田氏の「工場の歴史」の指導理念に誤りがあったということである。即ち50年代の日本では、大量生産と大量消費が結合した経済の新循環が起こりつつあった。この新循環によって50年代には労働者の意識に大きな変化が生じた。その結果職場の中に私的価値の優位＝個人・家庭の幸福に価値を置く労働者が出現した。彼等は石母田氏が措定したプロレタリア革命のにない手としての神聖な労働者のイメージとは全く質的に異なった存在であった。結論的に言えば、石母田氏はマルクス・

7) 石母田正(1960)『『国民のための歴史学』おぼえがき』、井上清・石母田正・奈良本辰也・竹村民郎共編『現代史の方法(上)』三一書房、p. 89~90

8) 石母田正(1952)「村の歴史・工場の歴史」前掲『歴史と民族の発見』、p. 290

9) 遠山茂樹(1954)「何が行動の力を生みだすのか」『世界』第102号、p. 137~8

10) 竹村民郎(1960)「国民と歴史」前掲『現代史の方法(上)』、p. 34~41

レーニン主義学説の影響にとらわれて、50年代の労働者意識の画期的な変化を認識できなかったのである。さらに言うならば、石母田氏の現実認識の歪みは、51年に共産党が採択した「新綱領」の路線の強い影響によって生じたということである。ここで詳述する余裕はないが、60年に石母田氏は不十分ながら学問と共産党との関係についての認識に誤りがあったという点に関して反省している。<sup>11)</sup>「工場の歴史」が改めて労働者自身の問題として提起されるに至るのは、55年5月『歴史評論』に職場の歴史特集号が掲載されたときに始まっている。53年から55年にかけての時期は、日産自動車争議、三井鉱山企業整備反対斗争、尼崎製鋼所争議、近江絹糸争議、日本製鋼室蘭製作所争議もあり、また春斗がはじめて成立した。労働運動を中心として、学生・婦人・農民・市民・平和・文化・消費の諸運動が互いに連繋しあって、革新国民運動へと大きく結集していった。保守と革新の諸政党がそれぞれ合同して二大政党制が成立したことにも表れていたように、55年は経済の高度成長の起点に対応する55年体制の成立した年であった。

「職場の歴史」特集号の内容は、職場の歴史をつくる会・N工場グループ、「労組の歴史」、同国鉄グループ「特急さくらが走るまで一客車区に働く人たち」、同東京証券取引所グループ「私もついて行く一きみよの手記」等の組合結成までの回想や、職場斗争の記録である。まさに職場の歴史をつくる運動は50年代、全国の職場に現れてきた自主的なサークル運動のスタイルをベースとして、労働者をにない手とする労働者の歴史を書く運動であった。さらに言えばそれは石母田氏が工場の歴史の提唱中でイメージした様な前衛的労働者の運動ではなく、ごく普通の職場生活をしてきた人々が自らつくった労働者の歴史を書く運動であった。

#### 第4章 職場の歴史とは何か？

かくのごとく考えてくるならば、職場の歴史をつくる運動は、職場で働く人々の文化運動としての性格をもったものである。しかしこれまでの文化運動、例えば歌声運動や映画サークルのような芸術と異なる点は労働者が歴史というもの、「科学」を要求したということ、それも単に書籍による学習とも異なり、自らの職場と生活のなかにこれを求め始めたということである。前述した『歴史評論』職場の歴史特集号の諸作品について、一部の歴史家から「あれは歴史ではない」という批判が出されたが、たしかに理論としてのまたいわゆる体系づけられた歴史としては展開されてはいなかった。職場の歴史の会メンバーも研究成果をあげようとか、裏門の研究者になろうとかいったことが第一義にはなっていなかった。この点で歴史家、学生等によるボランティア活動の協力が求められた。当時職場や地域の文化活動のなかで、職場の歴史運動と共通の性格をもち、同じようにサークル活動というスタイルをとっていたものに生活記録運動があった。もちろんそれぞれの運動のもつ社会的性格は、そのにない手であった労働者、農民、市民の拠って立つ基盤に応じて異なっていた。しかし56年河出書房新書『職場の歴史』が出版されたころを境に、職場の歴史運動と生活

11) 石母田正前掲論文、p. 116～120

記録運動の交流がしだいに深かめられた。

そこで労働者が歴史を書くモチベーションであるが、前述の N 労組職場の歴史サークルの事例をあげておこう。「われわれの労働者は、小学校か中学校をでたものばかりで『書く』ということは全くおっくうだ。文章というものに何か縁遠いものを感じている。それがこうして自分の職場の歴史を書いてみようと思ったのは、自分たちがどん底の生活から遂に組合をつくった喜びをみんなに知ってもらいたいからだ。同じような職場で、組合もつくれず今なおみじめな生活をしている仲間たちの間に団結の思想を強めたいのだ」<sup>12)</sup> この藤本敏雄氏の言葉には「N 労組の歴史」を書いた動機が簡潔に述べられている。彼によれば組合結成前は「大凡日給一四〇円で昇給額は一年に十円位だからほとんどの労働者が長く三～四年、短いときは十日位でやめて転々と渡り歩くという状態だった。三〇才位で廿四回も変わったものもいる。それに職人のものは、ほかへいけば高く雇ってくれるところがあるという安易な気持をもっている。親父(経営者)は、もうけるために地方から十六～七才の少年をつれてきた。彼らは文句もいわないので、一五〇円位で一日十二時間も働かせる。」状況にあった。<sup>13)</sup> 日給一四〇円といっても、今では想像できないが、55年頃の公務員の初任給は八七〇〇円程度であった。

だが N 労組サークルにとって、なにより大切なことは、労組結成後職人と若い見習工との間に感情的な溝ができたことである。組合結成以前両者は経営者のきびしい管理下で、密かに協力あって組合づくりを進めた。したがって両者の間には共通の意識で結ばれ、全部まるめて一つであった。組合結成後は状況の変化とともに夫々異なった要求を主張するようになり、感情的な対立が生じたというわけである。組合活動の中心であった若い見習工たちは、頑固な職人氣質には反撥しつつ、一方で彼等を技術の伝承者として尊敬していた。職人とのコミュニケーションの回復はいかにして可能か。

若い見習工たちは、組合結成後から職人との間にはかけ橋をかけるために、職人の歴史の提案を職場の歴史をつくる会に提案した。問題はこういう提案に対応できるアカデミストが育成されているかどうかであった。こうしたアカデミストは自ら「新しいインテリへ転生」を自覚すると共に、労働者が提起した問題を解決するため、自己の専門研究において一定の実力を備えていなければならないことは言うまでもないだろう。職場の歴史をつくる運動に参加した研究者、学生は労働者とのコミュニケーション能力を育成する第一歩として、まづ労働者の歴史をつくる現場に参加し、そこからアカデミズムとアマチュアリズムの間にはかけ橋をかける自己の役割を自覚的に学んでいった。しかし彼等の自己形成のプロセスは極めて困難であった。なぜなら当時の大学、研究機関のカリキュラムには労働者に対する学習協力を目的としたボランティアのコースなど全く無かったからである。ところで職場の歴史の現場では、労働者の書いた生活史、自伝をどのように科学的なレベルまで高かめるかという模索が続いていた。職場の歴史の現場の資料—膨大な組合議事録、組合ニュー

12)『早稲田大学新聞』1955年5月17日付。「組合結成の喜びから・『職場の歴史を創る運動』に学ぶ—たかめる労働者の思想変革—」

13) 前掲『早稲田大学新聞』



ス、機関誌、サークル誌、ビラ等をどうやって整理し分類するか、それらの資料をどのように分析して歴史を書けばよいのか等について、様々な激論が斗わされた。こうした論議から一挙に解決方法が発見されることはほとんど無かった。その最大の理由は、日本の大学の歴史研究の後進性にあった。前述したような職場の歴史をつくる運動が提起する課題は、近代・現代史の史料学、古文書学の問題や労働運動史研究方法の問題に関連していた。しかし長い間皇室中心主義の歴史の影響下にあった「実証史学」では、その旧態依然たる研究スタイルとあいまって、古文書学の対象はせいぜい近世までの古文書がその範囲であった。すなわち近代・現代の史料学は全く存在しなかった。労働運動史の研究はアカデミズム史学ではまだ市民権をえていなかった。未だ歴史学の方法や古文書学等を革新する条件が大学に用意されていなかったから、職場の歴史サークルに参加した多数のボランティア学生の多くが、労働者の歴史にたいする多様な要求に答えられなかったのは当然なことであった。彼等は自分の無力にいたたまれず会から去っていった。こうした状況のなかで労働者はインテリへの信頼感を喪失した。労働者とインテリとの溝が一向に埋らない現実と直面して、会は薄氷を踏む思いで自覚していた。

ひるがえって職場の歴史サークルが集団で作りだした自分史はどのようなものであったか。例えば東京証券取引所グループがつくった「東証の歴史」は、東証に勤務していた女子職員の一人が生活記録風に誌した自分史をもとにして集団で討論し、東証の歴史としてまとめたものである。53年田舎の新制高校卒業と同時に東証に入所した K 子は、やっと職場になれ始めた頃、同じ文化部の M から組合結成を準備するための秘密の会合に誘われる。事の重大さに驚いた K 子は父母と相談した結果その誘いを断り、組合結成の動きがあることを係長に報告してしまう。その後組合結成が実現し、K 子はおづおづと組合に加入する。労組のスト突入、警官の不当介入による弾圧とそれに抗議するデモ行進等を重ねる過程で、K 子は初めて警察が職場の同僚たちにふるったすさまじい暴力の実態を目の当たりに見て、当初距離を置いていた組合の役割を再認識させられる。「警官の兜の波とまむかいておのづとスクラムの堅さ覚ゆる」といった短歌を文中いくつも散りばめて書かれた「東証の歴史」は、『歴史評論』や56年に刊行された河出新書『職場の歴史』に採録された。54年の近江絹糸労組のストが象徴したように、女子労働者の人権闘争が際立った時代であったから、ごく普通の女子職員が書いた「東証の歴史」は、俄然女性の注目の的となった。しかし「東証の歴史」では、組合と自己との同一化の面から個人史が書かれていたために、自分の感情を内面化して、組合と自己を相対化するという営みへの回路を欠いていた。つまり組合と自己を同心円構造的に連続して結合するという思考方法—当時の同じような境遇に置かれていた労働者の生活記録にも共通する発想を超えることができなかつたのである。

当時ジャーナリズムでは、サークル運動論ブームとの関連で、職場の歴史をつくる運動はいろいろな内容を持って論じられた。『朝日新聞』関西版56年5月7日付は『職場の歴史』の書評の中でつぎのように述べた。「生活つづり方が個人の身近の雑感という形になりかねないのに対して、職場の歴史をつくる運動では主体は集団である。……焦点の合わせ方は、このように、ある時は『集団のなかの個人史』であり、ある時は『集団の歴史』であるが、いずれにせよ、自分の身近な職場

の歴史をつづることによって、日本現代史に接近してゆこうという試みがあらわれたということ自体が、大いに注意されてよい」「これだけすぐれた目的意識をもってつくられた運動の成果が、新書という形で発表されたことは残念である。さまざまな職場の歴史を、もっと深く広く掘り下げることが、今後の課題になるだろうし、またそうすることによってはじめて、歴史家の期待にも沿えるのではないか。そういった意味ではこの本(河出新書『職場の歴史』一筆者注)は新しい文化運動への序曲だと考えられなければならない。」この『朝日新聞』の評価には当時のジャーナリズムや文化団体、労働組合等が寄せた職場の歴史をつくる運動への期待が明快に反映されていた。労働と生活のなかに培われた思想や感性の考察を通して、新しい文化形成の機縁を見出そうとしていた南博氏、武田清子、木下順二、井尻正二、倉橋文雄、田中正俊、石母田正、太田秀通、佐多稲子、鶴見和子、鶴見俊輔の諸氏等も新書出版を機会に会への関心をよせた。私の手もとには知識人たちが寄せたメッセージがたくさん残されている。彼等は進歩的歴史家が学問(科学)としての価値をほとんどみつめないまま切り捨てた労働者の歴史をつくる運動を積極的に支持したのである。

## 第5章 文化運動としての職場の歴史

たしかに1955年をさかいとして、労働運動の領域における文化運動に大きな変化が現れた。くりかえすとこれまでの労働運動が比較的文化的活動を軽視してきたのにたいして、55年以降のそれは全く違った質的転換を示した。そうした新しい動きを端的にみせたのは55年7月17日、東京都の日本青年館における国民文化会議の結成である。これまでともすれば文化運動に冷淡であった日本労働組合総評議会は、これまでのそうした傾向を反省し、多くの中立系組合、サークル運動の人々と協議し国民文化会議をつくりだしたのである。国民文化会議は56年11月3～4日、東京都千代田区の専修大学で、第1回国民文化全国集会を開催した。集会には都内のみならず全国から専門家、組合教育宣伝部担当者、サークルの人々や市民が集まった。集会の目的は専門家と組合、サークルの三者が互いに協力して、国民文化創造の条件を討論することにあつた。この目的にそつた討論の場として歴史(職場の歴史・組合史)音楽、舞踏、映画、文学、美術、写真、演劇、生活記録等12の分科会が設けられた。当時私は国民分科会議の運営委員の一人として、国民文化全国集会の準備段階から積極的に協力し、とくに歴史分科会のプログラムを準備した。歴史分科会は職場の歴史をつくる運動の会員、組合史編纂委員会の幹部、歴史学習サークルの人々、そして鶴見俊輔氏、石川弘義氏、松島栄一氏などの専門家も参加して進められた。職場の歴史をつくる会から、これまでの歴史書は結果だけが記述されていて、労働者にとって大切な過程が捨象されているが、そうした歴史書の在り方が反省されなければ、新しい歴史をつくる問題もつきつめた論理を遂うことは出来ないという問題提起を行った。そうした意味において組合史編纂委員会の側からも、職場の歴史、個人史、生活記録をどのように組合史づくりに反映させていくかその方法が問われた。具体的な経験報告として国鉄労組品川客車区分会職場の歴史グループから、挫折した2・1ストの歴史の検証、厚生省母の歴史サークルによる母の歴史絵巻物共同製作の過程でサークルメンバーの歴史意識がどの

ように変化したかについての報告、鶴見製鉄労組と横浜興信銀行の組合史づくりの経験等が述べられた。そして鶴見峻輔氏は現代史を見ているものであるとともに行動しているという立場から、労働者の歴史づくりを論じた。鶴見氏はその中で「修正のきかない仮説などおしたてるのでなく、修正に応じられるような形で出していくべきである。……少数派の尊重ということにもつながる。そういう意味で現代史の方法論は昔の歴史の方法論とはちがう。組合史を書くことと理論をきたえることは同じことだ。あらゆる少数派と一しょにやってみてゆく条件をみつけてゆく必要がある」<sup>14)</sup>と述べた。鶴見氏によれば職場や生活は文化運動の根拠地のみならず、理論創造の母胎であるというのである。たしかに鶴見氏の提案は労働者の歴史をつくる運動が日本の思想形成に持つ意味を考える場合の積極的な視点であった。しかし既に明らかなごとく、労働者の歴史をつくる運動自体は新しい普遍をいかにつくるかという能力において未開発であるとすれば、問題はあくまでも思想生産の根拠地であるアカデミズムと労働者の歴史をつくる運動との具体的な提携の接点をどうつくるかに求められなければならないであろう。歴史分科会の総括において、私は組合史をつくるセンター設立の提案をした。組合史をつくるセンターの中で専門家と労働者が協力して、時期区分の問題、聞きとりや生の資料の整理と分類の仕方、生の資料をどう体系化するか、職場の歴史と組合史の関係等についての理論的な基礎づけをしようとしたのである。

しかし国民文化会議の文化活動の一環として組合史をつくるセンターを設けることはできなかった。その背後に国民文化会議の歴史の浅さと、総評傘下の単産という巨大組織における歴史運動の軽視という壁があった。国民文化会議でもこの壁を打破するために第2回以降の国民文化全国集会等において努力を重ねた。国民文化会議会長で高名な歴史学者でもある上原専祿一橋大学教授と同会議事務局長南博一橋大学教授の努力は際立っていた。それは例えば、58年全通信労働組合の機関誌『全通文化』（第41号）掲載の上原氏の巻頭論文「文化運動の意味するもの」（口述筆記）が一つの手懸りを与えてくれる。上原氏は言う。「**上原会長** 全通でも職場の歴史をつくる運動がありますか。**福井**（同労組中央本部教宣部長—筆者注）それは、ボツボツですが出て来ています。**上原会長** それは文化運動の領域としては大事なことです。職場の歴史を作るということは、自分達の生活を原則において意識すると同時に、問題をハッキリさせるということです。」では南博氏はどうであろうか。57年11月18日付『日本読書新聞』に掲載された南氏の論文、「日本文化の前線—今日のサークル運動—」のなかで、つぎのように述べている。「生活記録運動や、組合史や職場の歴史をつくる運動や学習運動が果している役割も決して小さくない。ことにそれらは青年団運動の組織化や労働組合運動の強化とむすびつきながら、民主的な人間関係の確立や明日の文化のための『肥沃な土壌づくり』の役割を果たしつつある。しかしこれらはまだようやくはじまったばかりというべきだろう。そうして、これらのサークルが今日、もっとも必要とするのは、サークルとサークルの横のつながりと、それぞれの分野の専門人とサークルのあいだの協力である。」50年代後半

14)『文化会議』国民文化全国集会特集号(1956)、第12・13合併号

『日本読書新聞』1957年11月18日付。南博「日本文化の前線—今日のサークル運動—」

15) 上原専祿(1958)「文化活動の意味するもの」[訊く 人福井秀政]『全通文化』第41号

以降組合史、生活記録運動の領域で、続々と本稿の末尾の参考文献にあげたような秀れた組合史、個人史が生れていった。歴史づくりのネットワークの拡大を背景として、職場の歴史をつくる会は57年中国科学院院長郭末若氏、58年ワルシャワ大学日本文化研究所長コタニスキー教授との間で、歴史運動における労働者の役割をめぐって経験の交流をおこなった。

## 第6章 個人の歴史の方法

労働者の歴史をつくる運動における専門家との共同戦線という問題は57年第2回国民文化集会あたりを境として、盛んに論議が展開した。したがって職場の歴史をつくる会はこの課題を国民文化会議に委ね、会は差し当って、職場の人々が、自分の生活を歴史的に見詰める方向＝個人の歴史をつくる運動を全面的に展開していった。58年5月に発行された職場の歴史をつくる会機関誌『職場と生活』第10号に、国鉄大井工場に勤務する土田教助氏の「友達が家を建てた話」が掲載された。前述した「私もついて行く一きみよの手記」も平凡な女子職員生活を過ごしていた女性の意識の変化を職場や組合との関係において生き生きと描いていた。しかし土田氏の作品では全く視点を變えて、組合斗争などと密着した形ではなく、あくまでも彼個人の私生活の変遷から出発して、自分の夢とか願いそして悲しみ等を掘りさげて情感や意識を形象化した。つまり土田氏の作品はごく普通の生活をしている労働者の意識の変化を、組合などの外からの関係との拘りとしてではなく、愚かしくもはかない夢をもって生きた日々をしのびながら描き、同時に東京という大都会で生きる不安や挫折感をも素直に描いた。

「友達が家を建てた」という文章で始まる土田氏の個人史は「就職前」「新しい職場」の二章で、彼が秋田県の山奥からでて秋田車電区に勤務し、鉄道員生活を始めた当時を回顧する。「私の家」「私の仕事」で家庭環境や職場生活を描き前段を終っている。つづいて「敗戦」「辞職願」「斗い終って」の三章で敗戦前後の社会との関連にふれ「鉄道教習所」「首切」「職場にもどる」「転勤」「定時制」で労働運動とのつながりが語られる。さらに「病気」「どぶねずみ」の二章のなかで、「車電手」であった彼をとりまく職場の複雑な人間関係かつづられる。後半の「棧構改革」「鉄道工場へ」「父の死」「読書」「定時制卒業」「コーラス」「東京へ」「都会の中で」の各章で、秋田から上京して国鉄大井工場に勤務した土田氏の生活の変遷と職場、社会の変化が詳細に描かれている。

個人史というと読者に関係のない事実の羅列と思われがちであろう。しかし土田氏の長篇は職場と生活の細部にまでまなざしを注いで、自分史を客観的に描いてた。思うに土田氏の作品は大都会に憧れて上京して、待望の東京生活を實現したことは、自分を本当に幸せにしたかと問い直しているのである。自分は未だ独身で、鉄道の寮生活住いであるが、秋田の友人たちはすでに家を建てて、マイホーム生活を楽しんでいる。都会で生きるという夢を實現させて得意になっていた自分は果たして幸福であったのだろうか。土田氏は自分の歴史に疑問符を投げかけているのである。土田氏の作品は国鉄当局の圧力や職場のしがらみと斗って、自分自身の人生を革新することに価値を置

く考え方にあえて挑戦している。その点において土田氏の作品は今までの個人の歴史にない視点をきりひらいたのである。

1957年頃から60年代初頭の時期、職場の歴史の機関誌上に続々と多彩な内容をもった個人の歴史の作品が掲載されていった。いまここでその詳細にわたって述べることは必ずしも必要ではない。ここで注意すべきことはそれらの大半の作品が後述するような合評会の批判をもとに、何回も文章の無駄を省き不足を書き加える作業を重ねていたことである。その結果これらの作品には人間のもつおろかさや哀しみや喜び等を大げさに表現することなく、全体の構成のなかにきちんと位置づけて表現しようという意欲が共通に現れてきたということである。それからもう一つ、執筆者たちは人間生活の影の部分や、生活意識の中にかくされている差別意識と向き合おうという意識も育ってきたということである。そうは言ってももともとパーソナルな個人史は、ウソや誇張された話や自己弁護等を共通してもっている。もちろん職場の歴史をつくる会がつくりだした個人史も当初から同様の傾向を十分にもっていた。もし伝記の尺度を人間存在の深淵に迫るといふところに置くならば、アマチュアが書いた個人史は秀れた文学作品や文学者の書いた第一級の伝記に比較して、読むに値しないものであるということになるかもしれない。

曾て佐伯彰一氏は自伝について「自伝作家のウソは、さきやかで、ご本人だけが力みかえっていて、どこかおかしみさえただよう。ウソ、隠しごとまでもふくめて自伝ぐらい、丸ごとの人間を知らせ、味わわせてくれるジャンルは、又とないだろう。」と言われたことがある。<sup>16)</sup> まことに至言である。私は個人の歴史の諸作品をそのような柔軟な視点から再評価したいのである。そしてまた私は、個人の歴史を書く運動が一体いかなる動機で、5年以上もの長い間続けられたのか、という問題を改めて考えたいのである。個人の歴史運動の初期、書き手が発表した作品は意気ごみすぎて過大な自己表現になる傾向があった。個人の歴史の作品の読み手は退屈してしまった。このためサークル組織は気分的にも壁につきあたり、会員はいたずらに新陳代謝をくりかえすだけになった。職場の歴史をつくる会は運動の危機的状況を打開するために、発表された作品の合評会を恒常化した。作品を発表していない会員でも合評会に参加した者は、かならず何等かの批評活動をうながされた。合評会では当然に作品の批評をめぐる意見の対立と、白熱した論争が出てこざるをえなかった。しかしアマチュアの人たちを主体とした批評活動は効率が上らず、手間がかかったことも事実であった。五年以上の批評運動のなかで、サークルの中から「書き手」のみならず「評論家」を生みだす努力が続けられた。少しずつではあるが批評の成果が会の共有財産になった。読み手が熟練すれば、書き手も仲間の批評を消化して自分史を発表するまでの時間を当然に長くかけるようになった。

58年頃書かれた職場の歴史をつくる会国鉄サークル機関誌『仲間には』は言う。「自分の歴史を書きあげると、分会機関誌に発表し、それを全会員や職場の人々に読んでもらい、必ず合評会を開いてその中で書いた人の考え方、生き方を自分の問題として考え、又、批判しています。」。こうし

16) 佐伯彰一(1991)『日本人の自伝』講談社学術文庫、p.5

た批評活動は職場の歴史をつくる会のすべてのサークルに共通するものであった。例えば恩給局サークルの清水澄夫氏は批評会の批判をもとに、自己の作品「魂あいふれて」を4回改作した。その結果改作後の作品は鶴見和子氏等から評価された。ともあれ個人の歴史をつくる運動は作品を書くか否かを問わず、全会員を参加させて5年以上続けられた。ここで今一度くり返して言うと、萌芽的ではあるが、作品の質的側面に変化が現れてきた。つまり初期の作品にはウソがゴキブリのようにはい回っていたが、精一ぱいの批評活動によって、そうした状況を少しづつあらためていったのである。また初期には個人の歴史を書くことは贅沢な余けいなことをやっていると考えがちであった会員も、作品の創造と批評活動を重ねる過程で、日常生活世界に生きている自分をふくめ、歴史を客観的にとらえることは、どうゆうことかについて考えるようになった。つまり会員は職場や個人の歴史を書くことは、自分の歴史観が変わることにつながることを理解したのである。

1950年代の生活記録運動、歴史サークル運動等をふり返っても、労働者自ら歴史を書くことは極めて少なかった。そうした壁を破るものが個人の歴史をつくる運動にあったことはたしかであろう。56年の『経済白書』は「戦後は終わった」と述べた。我が国の輸出と生産は急上昇し経済界はいわゆる「神武景気」を謳歌した。55年保守と革新の諸政党の合同による二大政党制の成立、56年スターリン批判が相ついで勃発した。国際的には社会主義体制の混迷と、政治、経済社会の転換に対して、職場の人々はいかに新しい価値観を自らつくることができるかを真剣に考えた。そのため前述した1957年国民文化会議は「国民文化の創造」を共通テーマに掲げて、ユートピアとしての「明日の文化」のイメージを提起しようとした。それをもっとも明快に表現していたのが「明日の文化」のための豊かな土壌づくりの役割を果たしつつあったサークル運動であった。当時の多彩なサークル運動の中でも、個人の歴史をつくる運動はまさに働く日本人の価値観変革に直接拘る運動であった。運動に参加した人々はその中で自らの生活を原則において意識すると同時に、自らの価値観をどう形成するかを真剣に問うていたのである。だが60年前後の時期日本を揺るがした安保斗争の巨大な波にまきこまれて個人の歴史をつくる運動は消滅した。職場の歴史のサークルの人々は安保斗争の動員体制に組みこまれて、もはや個人の歴史を書くことにエネルギーを費す余裕をもてなくなった。

海外の人々から個性がみられない、自己主張がない、と言われている現代の日本人から見れば、50年代の歴史運動は奇異に映るかも知れない。しかしすでに明らかなように、運動に参加した人々にとって、職場や個人の歴史を書くことは、歴史という鏡に自分を映しだして、そこから自らのアイデンティティを形成していくことであった。今日からみれば50年代は復興から成長への画期であったにもかかわらず、60年代は高度成長時代の陰に隠れている。私は忘れられた50年代の職場・個人の歴史をつくる運動の再評価から始めて、50年代における日本人のアイデンティティ形成の問題をさらに考えていくであろう。

了

#### 参考文献

- 1) 内山光雄(1954)『幹部斗争から大衆斗争へ』労働旬報社

- 2) 全国三井炭鉱労働組合連合会編(1954)『英雄なき113日の闘い—三鉱連企業整備反対斗争史—』労働旬報社
- 3) 日産自動車労働組合(1954)『日産争議白書』日産自動車労働組合
- 4) 日本鉄鋼産業労働組合連合会(1955)『日鋼室蘭斗争の経過と自己批判』日本鉄鋼産業労働組合連合会
- 5) 日本製鋼所室蘭製作所新労働組合(1956)『日鋼争議の全貌』
- 6) 産別会議史料整理委員会編(1958)『産別会議小史』産別会議残務整理委員会
- 7) 井上靖・石母田正・奈良本辰也・竹村民郎共編(1960)『現代史の方法(上)』三一書房
- 8) 歴史学研究会編(1961)『戦後日本史(1～2)』青木書店
- 9) 職場の歴史をつくる会編(1956)『職場の歴史』河出新書
- 10) 鶴見和子編(1954)『エンピツをにぎる主婦』毎日新聞社
- 11) 楫西光速・帯刀貞代・古島敏雄・小口賢三(1955)『製糸労働者の歴史』岩波新書
- 12) 三菱美唄炭鉱労働組合(1960)『炭鉱に生きる』岩波新書
- 13) 上坂冬子(1959)「職場の群像—私の戦後史—1」『思想の科学』1959年2月号所収